人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	個別人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

大阪府和泉市

○学校名

和泉市立信太中学校

○学校のＵＲＬ

http://www.city.osaka-izumi.lg.jp/school/jhsch/shinoda/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】１・２年６学級、３年７学級、【特別支援学級】５学級、
【合計】２４学級

○児童生徒数

【全生徒数】７２６人（平成２６年１１月２７日現在）
（内訳：１年生 231 人、２年生 222 人、３年生 273 人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
自律…自ら考え、学び、判断し、行動する自主性のあるたくましい生徒の育成
努力…努力の過程を大切にし、最後までやり抜く粘り強い生徒の育成
誠実…自他の人格を尊重し、友情や人間愛によって支え合う優しい生徒集団の育成

【人権教育に関する目標】
（基本方針）
　すべての教育活動を通して人権教育を積極的に推進し、「人権尊重の精神」に則った民主的な社会の形成者としての資質を養うことに努める。また、それに加えて人権問題に対する正しい認識と理解を深め、現存する差別の解消を目指した教育実践に取組む。
（重点目標）
① 「人権尊重の精神」に徹し、生徒や地域の実態に則した教育内容を考え、実践することによって、人権感覚豊かな生徒の育成に努める。
② 確かな学力を保障するために、豊かな教育内容の創造をすすめる。
③ 校内における「人権教育研修体制」を整備し、より高い教育実践に結びつけることを目指す。

○人権教育に係る取組一口メモ

自分の人権を大切にし、他者の人権も尊重できる意識・意欲・態度の育成

○人権教育にかかる取組の全体概要

○　自尊感情を育てるとともに、安心・安全な学級・学年をつくるため、班活動を取り入れる
○　行事を通じて人権感覚の育成を図る
　・平和学習…平和登校日、沖縄修学旅行
　・男女共生…職場体験、保育実習
○　各学年の実態に応じて個別人権課題を学ぶ（本実践）
○　校内研修を活用した指導方法の工夫と内容の充実を図る
　・先進校から学ぶ（講師招聘、学校訪問）
　・授業研究
　・情報共有（通信の発行）
○　小中連携、地域連携、家庭連携、関係機関との連携を図る
　・小学校との合同研修、「目指す子供像」の共有
　・児童養護施設職員との交流
　・地域教育協議会への参画
　・個別の支援の必要な生徒・家庭と関係機関をつなぐ
○　生徒・保護者の状況把握
　・日本語指導の必要な生徒
　・適応指導教室の運営
　・卒業生の状況についての情報収集、状況に応じた卒業生への支援

３．特色ある実践事例の内容

◆　「ホームレスの人たち」から学ぶ

（取組のねらい、目的）
○　ホームレスの人たちに対する偏見をなくす。
　・不景気や格差の拡大を背景に、誰もが突然の事故、病気、解雇などで困窮状態に陥る可能性があるということを理解する。
○　自分自身を客観的にみたり、周りの仲間たちの背景を考えられるようになる。
　・貧困の問題は本校の子供とも無関係ではない。厳しい経済状況の中で保護者が様々なしんどさを抱え、それが子供の生活に深刻な影響をもたらしていることがよくある。子供たちがホームレスの人たちと出会い、その生活の背景を知ることで、自分のもっていた偏見に気づくだけでなく、改めて自分の生活を振り返る。
○　ホームレスの人たちを襲撃する事件について学び、加害者の心情について考える。
　・ホームレスの人たちを襲撃する中高生がおり、ホームレスの人が命を落としてしまうという痛ましい事件も起きているという現実を知る。
　・その加害の中高生は、学校にも家庭にも居場所がない、いわば「心のホームレス」状態にあることがあり、ストレスや自分の価値を認めることができな

いつらさから、より弱い者に対して攻撃してしまうこともあるのだということを知る。

・様々な課題のある学年の子供たちにも、くらしの中でのしんどさがあり、その疎外感や孤独感を埋めるために、様々なトラブルを起こしてしまっているかもしれないということに気づき、すべての子供たちが互いを理解するきっかけとする。

（取組を始めたきっかけ）

一部の子供たちが様々な課題を見せるようになり、トラブルも多く起こるようになった。また一方で、様々な家庭の事情などから、学校に来ることに意義を見いだせず、休みがちになる子供もいた。

どちらの子供たちも、教職員からの直接の働きかけだけでなく、子供どうしでつながっていくことが必要である。子供どうしの関係の弱さや、教室に彼らの居場所がなくなっている現実を、少しでも何とかできないかと思っていた。

そんなとき、ホームレスの人たちに対する支援活動に長年取り組んでおられる方から学ぶ機会があり、この問題について是非子供たちに伝えたいと思うとともに、これを通じて今の学年の課題に合った取組ができるのではないかと感じた。

ホームレスの人たちのことと同時に、襲撃事件の加害者である中高生の生活背景や気持ちも考えることを通して、身近なところでしんどさを抱え、様々な行動をとってしまう子供たちの気持ちに気づいてほしいと思った。それができれば、すべての子供たちが互いを理解しあい、学級や学校を安心していられる自分の居場所、つまりホームだと感じられるようになるのではないかと考えた。

ホームレスの人たちの多く生活する街は、校区からは遠く離れているが、そこへ出かけたり、支援者を招いたりすることで、実感の伝わる取組は可能だと考えた。

こうして、子供と子供をつなぐための取組の一環として、「ホームレスの人たち」について、学年でとりくむことにした。

（取組の展開）

１．実行委員の募集、フィールドワークの事前学習
２．「私のもちあじ」のワーク（学級活動）
３．フィールドワーク、当事者からの聞き取り（実行委員）
４．ホームレスの人たちについての学習（学級活動）
５．支援者からの聞き取り（学年全体）
６．ふりかえり

（取組の内容）

まず、実行委員を募集した。実行委員会の名前は「ＨＲ実行委員会」とした。本来、子供たちにとって安心できる「ホーム」であるはずの教室、つまり「ホームルーム」と、人権の英語「ヒューマンライツ」の略称をかけて名付けた。各クラスで担任から呼びかけてもらい、１９人のメンバーが集まった。

実行委員会では、２月にフィールドワークを行った。電車を利用し、ホームレス

の人たちの多くおられる街に出かけた。ホームレスの支援活動にとりくんでいる方と一緒に街を歩きながら、公共施設や、支援活動の拠点となるところを案内してもらった。１泊１，５００円くらいの宿泊施設や、飲物一つ５０円の自動販売機に子供たちは驚いていた。もちろんたくさんのホームレスの人たちがいて、中には「ご苦労さん」などとねぎらいの言葉をかけてくれる方もいた。

そして、当事者から聞きとりをすることもできた。その方は子供の頃から親との関係があまりよくなく、大人になって仕事が続けられず、お金のない状態になっても、どうしても家に帰れずにホームレス状態になってしまった方だった。実行委員の一人から「今幸せですか」と聞かれ、「今は、一人で食べていけるくらいには仕事があるから…」とおっしゃっていた。

○　フィールドワークに参加した実行委員の感想（一部）

・私は、ホームレスの人たちに対して、偏見を持っていました。正しいこと、現状を知らずに勝手に「怖い」という印象をもっていました。だけど、詳しいことやその本質を知っていくと、だんだん自分の浅はかさに気づきました。…（略）…みんな自ら望んでホームレスになったわけではないのに、社会から蔑まれ過酷な環境のもとで生活を強いられている。私たちが向き合う現実は、すぐそばにあるのだと思いました。

・説明を聞きながら街を回っていると、何人か野宿者の方が声をかけてくれました。私たちが見て回ることに対して、「俺たちは見世物じゃない」と不快に思う方もいると事前に聞いていました。だけど私たちに話しかけてくれた方は、優しい人ばかりでした。「社会学習か？　ご苦労様です」「どこから来たか知らんけど…（略）…、ご苦労様」などと、ねぎらいの言葉をかけてくださいました。…（略）…その中である方が言ってくださった言葉が、「笑えよ。歌えよ。泣くなよ。」きっとその方は、そうやって越えてきたんだろうなと思いました。私たちには想像もできないような経験をしてきたであろうその方の言葉は、とても重かったです。

ホームレスの人たちと実際に出会ってみることで、子供たちは自分の中にあった偏見に気づき、その優しさや温かさに触れることもできた。こうして自分で感じることで、お互いの存在を認め合うことが大切なのだと、私たち教職員も実感することができた。

また、日頃は課題が表面化しやすい子供たちへの対応に追われて、話を聞く時間が取りにくい子供たちと、一部ではあるが、街を歩きながら、また電車に揺られながら、いろいろな話ができたことは、大きな収穫だった。

学年全体に対しては、子供と子供をつなぐ試みとして、まず「私のもちあじ」（大阪府教育委員会「人権教育教材集・資料（平成２３年度版）」所収）のワークを各クラスで実施した。なかなか自分のもちあじを見つけられずにいた子供に対し、周りの仲間が「意外と行動力がある」などと持ち味を教える場面も見られ、授業後の感想にもそのことがうれしかったという意見が多くあった。

続いて、ホームレスの人たちについて知っていること、どのようなイメージを持

っているかなどについて交流するとともに、ホームレスの人たちを襲撃する事件がおこっていることについて考えさせた。
　さらに、フィールドワークで案内をしていただいた支援者の方に学校に来ていただき、学年全員でホームレスの人たちのことについての聞き取りを行った。その際、この問題についてまとめ、更に地元の子供たちの夜回り活動について取り上げたＤＶＤ（「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」製作の教材用ＤＶＤ“「ホームレス」と出会う子どもたち”）も視聴させた。子供たちに、ホームレスの人たちの実態や人柄がよく伝わった。
　その結果、実行委員会のメンバー以外の子供たちも、自分たちの偏見に気付き、ホームレスの人たちが抱える様々な課題は、ホームレスの人々自身の課題ではなく、自分たちもそうなる可能性のあることも含め、社会の課題であることを理解した。
　また、社会の課題と自分たちの関わりについて知ったことで、ホームレスに関すること以外の社会問題についても、考えていくきっかけとなった。

（取組の主体や実施体制）
　学年の人権教育担当で企画し、学年会議で提案した。学年の全教職員で実施した。

４．実施する際に生じた課題及びその解決策

（取組を実施する際に生じた課題）
　前例のない活動だったので、学校の全教職員の了承、フィールドワークに参加する子供の保護者への説明と同意が必要となった。
　また、実行委員の活動時間の確保、学年全体でとりくむ際の授業時間の確保も必要であった。

（課題に対する解決方法）
　教職員や保護者に対して丁寧に説明を行った結果、大きな反対意見や、フィールドワークに対する心配などは特になかった。
　実行委員は放課後や土曜日などに活動し、人権教育担当者を中心とした教職員がつくようにした。学年全体で取り組む際には、総合的な学習の時間を活用した。

５．実践事例の実績、実施による効果

（取組が効果を上げた実際の事例）
　学校生活に意義を見いだしにくかった子供が、この取組の中で他の子供とのつながりが深まり、前向きに学校生活を送れるようになった。また、当事者の生活背景を、自分の生活と重ね合わせて考えることができた。
　この取組は、人と出会い、その人について考えることを通して、自分を見つめ直す機会になったのだと考えている。
（取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項）
○　様々な人と出会い、共感することが、自分を見つめ直すきっかけになる。
○　教職員の仕掛け次第で、どのような取組も子供と子供をつなぐ集団づくりに結びつけることができる。

６．実践事例についての評価

（取組についての評価、及びそう評価する理由）

○　個別人権課題についての知的理解という意味では、大きな成果があった。

・「ホームレスの人たち」についてとりくんで、子供たちのホームレスの人たちについてのイメージは確かに変わった。「怠けてばかりいてお金のなくなった人」「自ら望んで気ままに生きている人」などといった偏見はなくなり、「家族の不幸や本人の病気、失業などが重なり、ホームレスの状態になった」「一日中段ボールを集めても数百円にしかならない」という事実を知り、そんな状態を許している社会に対して怒りを感じる子供もいた。そして、「自分たちにできることを考えていきたい」と考えるようになった。

・また、実行委員会では、ホームレスの人たちを襲撃する事件についてとりくんだとき、「いじめと同じや」という声もあった。自分ではどうしようもないことで蔑まれるという、ホームレスの人たちの置かれた状況と、いじめられている人が置かれた状況の共通性に気づくことができた。

○　襲撃する側の子供たちの孤独感に寄り添い、それを学校で目立って多くの課題を持つ子供たちの姿と重ねていくところまでは取り組みきれなかった。

・当初の目標としては、一人一人の背景や思いを知ることで、様々な立場にある子供たちが互いに理解しあい、つながりあえるところにまで集団を高めていきたかったが、この点については不十分であった。

・今後は、こうした集団づくりのための取組について、年度当初から計画的に進めていく必要がある。人と出会い、その人の思いや生き方を知り、自分を見つめ直すきっかけにすることを意識した取組を、今後も継続していかなければならない。

（現在、実施に当たって課題と感じていること）

今回取組を実施した学年で１学期にとったアンケートでは、自尊感情や自己有用感が全体的に向上している傾向が見られた。その意味では、教職員と子供のつながりや、子供と子供のつながりという面で取組の成果があったと考えている。ホームレス問題の取組そのものだけでなく、日々の授業のやり方や声かけの仕方にも、いい意味でこの取組の影響が及んでいるように思われる。

経験年数の少ない教職員が増えている中で、子供の言動そのものだけでなく、その背景にあるものを知ることの大切さを伝えていかなければならない。その上で子供と子供をつなぐ仕掛けをしていくことが、子供の自尊感情を育て、「教室をすべての子供のホームに」することに結びつくと確信している。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

和泉市立信太中学校
人権課題をテーマとする学習を通して、知的理解の深化と、子供たちがつながっていくことのできる集団づくりとを目標として取り組んだ事例である。 実行委員を募集し、計画の段階から子供たちの参加を求めることで、課題をより身近なものとして捉え、主体的に関わろうとする姿勢を育てている。「ホームレスの人たち」のことを理解するための学習の展開においても、内容に合わせて学級単位で、実行委員会で、学年全体で、というように、場面に応じた、様々な学習形態により、今の自分たちにできることを考え、自分を見つめ直す機会となるように工夫されている。このような取組を継続し、一人一人の自尊感情や自己有用感が更に高まることが期待される。また、前例のない活動として細かな配慮をしている点も参考になる。